

令和3年度 総社市つどいの広場事業（山手会場）業務委託 事業報告

1. 子育て親子の交流と場の提供と交流の促進

山手保健センターつどいのひろば

スタッフの人数

保育士5名 保健師2名 助産師2名 社会福祉士1名 ボランティアスタッフ1名

①つどいの広場 ちびっこひろばの開催

開設日数 月曜日～金曜日の週5日 開設時間 9:30～16:00

年間開所日数 226日 月平均 18.8日

年間登録組数 355組 年間登録者数(実) 456名

年間利用者数(延べ) 4,176名

年間利用組数(延べ) 2,904組(午前1,852組 午後1,052組)

2. 子育てに関する相談、援助の実施

保健師相談日 1年 175日 助産師相談日 1年 39日

3. 子育て及び子育て支援に関する講習会の実施

①赤ちゃんタイムの開催 (毎月第4木曜日) 年間参加組数 97組(10回分)

②プレママタイムの開催 (毎月第2火曜日) 年間参加組数 38組(10回分)

③親子体操 (年 4回) 年間参加組数 0組(全中止)

④性教育講座 (年 4回) 年間参加組数 13組(2回分)

⑤ママ先生による講習会 (年 11回 延 76名) エンパワメント事業

⑥食育プログラム (年 15回 延141名) 毎月ポスターの掲示

⑦親育ち講座

・赤ちゃんサロン (年 1回 延15名) ・子育て座談会 (年 3回 延22名)

・親育ち応援学習プログラム(年 2回 延15名) ・子育て講習会 (年 6回 延50名)

⑧市との連携

・市栄養士による栄養指導内容についての助言指導(随時) 講座(4回) 食育会議(2回)

・市の保健師に気になる子について相談(随時) カンガルー広場(月1回) つどいらっこオープン(2回)

・チュッピーこどもまつり→中止 ・幼稚園・保育園説明会(3回)

4. 地域子育て力を高める取り組み

①外あそびの日の開催 (毎月2-3回不定期) 年間参加組数 231組
(地域の主要公園への出張ひろば)

②愛育委員会との連携 (赤ちゃんタイムにて、今年度はコロナ禍で不参加)

③栄養委員会との協働 (年 1回)

④山手支援センターとの協働 (年 2回)

⑤親子クラブとの連携 運営のための相談(たんぽぽ・キリン・ライオン・わかば)

行事の協働(たんぽぽクラブ年 2回) 入会用紙の設置

⑥お話ボランティア (年 8回) 年間参加組数 延44組(今年度はスタッフによる)

⑦地域施設との協働 ・歯科衛生士(山手グリーン歯科)さんによる歯のお話(1回)

・お魚屋さん(平商店)に行こう ・英プレイさんによる英語であそぼう

・地域づくり協議会(健康福祉フェア)→中止

⑧祖父母利用者数 (延86名)

5. 特別支援対応加算事業(令和3年度より新規事業)

すくすくほっと相談 (毎週月・木曜日) 年間開催日数 92日 相談件数 230件

PEC (毎月第1木曜日) 5月～2月 9回 参加組数 延51組

6. 利用者のエンパワメント

・読み聞かせ ・ママによる親育ち応援学習プログラムファシリテーション

・広場内図書(雪舟文庫)のママボラ管理

・ママ先生による講習会

手作りリボン・つまみ細工作り、手作りおもちゃ、口腔ケア講習会、親子体操 等

7. 子育て支援団体等との連携・協働事業

- ・なかよし広場こっこ・ぴよこっこ・チュッピーひろばとの連携
- ・県大子育てカレッジ実行委員会参加 ・岡山子育てネットワーク
- ・おかやま地域子育て支援拠点ネットワーク ・NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
- ・愛育委員会 ・栄養委員会 ・山手福祉センター ・山手ふれあいセンター
- ・地域子育てボランティア育成(ちびボラの育成)
- ・山手健康福祉フェア参加 出張ひろば→中止

8. 研修会への積極的な参加 (年 46 講座 延107 名参加)

- ・子育てひろば全国連絡協議会 全国大会(オンライン) (3名)
- ・子育てひろば全国連絡協議会 リーダーシップ研修会(オンライン) (1名)
- ・子育てひろば全国連絡協議会 中堅者向け研修会(オンライン) (2名)
- ・就学前の非認知能力育成支援のための人材養成研修(3名) ・HiDadプログラム(1名)

【よかったこと】

・今年度も新型コロナウイルス緊急事態宣言やまん延防止等重点措置のために閉館となった時期もあったが、1月のまん延防止等重点措置期間では、総社市の担当の方が頑張ってください、人数制限と厳重な感染防止対策を行ないながら開催することができた。閉館中に、限界だと訴え、相談をされる保護者もおられ、改めてひろばの何気ない居場所がどれほど重要だったのかを痛感した。ひろばアンケートでも「広場を開けてくださってありがとうございます」等の声も聞かれ、ひろばの大切さを再認識することができた。

・今年度からプレ療育であるPEGを開始し、カンガルー広場とともに、総社市保健師さんとの協働で、親子の育ちへの細やかな支援が可能になったように感じている。すすすくほっと相談日を設けながら、広場での何気ない会話により、発達への不安を抱える保護者の支援を行なうこともでき始めている。

・地域とのかかわりや保護者同士、子ども同士のかかわりを通し、早期育児時期の困り感から、幼保への地域に帰っていくまでの支援を行ない、ひろば卒業者がひろばに通う親子の支援を行なうという地域循環型の支援の構図も微力ながら行なえてきたように感じている。

【改善点と今後の課題】

・昨年に引き続き、コロナ禍において脱メディアを提唱しながらもSNS等のメディアでの発信を行ない、よりメディアとの付き合い方への注意が必要となったように感じている。様々な実体験と感染予防、人数制限の中、生きた情報の発信の仕方など切実に感じている。

・スタッフや保護者のマスク着用による口の動きの模倣の遅れは、言語の遅れや人とのコミュニケーションの遅れにつながりやすい事や表情の読み取りの困難さは、今後の問題として示唆されている。また、感染予防の名のもと、早期からアルコール消毒やピストル型検温の額への仕草は、危険認知の遅れをも懸念されている。コロナ禍において、子どもの発達については、今後大きな問題が浮上してくることは間違いない。育児力の低下もそれに伴って益々増えてくることが予測される。背筋力低下による早産問題や抱っこの難しさ、産後鬱などによる年齢差のある兄弟のヤングケアラーや晩婚化による介護と育児のダブルケア、発達につまずきを抱える児の問題、家事力の低下等、育児事情の問題は多岐にわたっている。それらの問題とどう向き合っていくのか、研鑽を行ないながら、何気ない居場所としての『ひろば』であり続ける努力を更に行なっていきたいと痛感している。